

# 検査間相関関係から見る各種質問紙性格検査の妥当性の検討

—YG 性格検査、MAS 不安検査、淡路式向性検査、IDV 独自性検査、精研式パーソナリティ・インベントリー、オールポート・ヴァーノン人格検査—

宗内 敦\*

## I. 問題と目的

様々な質問紙性格検査<sup>1)</sup>には、それぞれ固有の検査項目（臨床尺度）がある。例えば、YG 性格検査は 12 の根源的特性因子、MMPI は多様な臨床項目、各種向性検査は内向一外向の向性度、精研式パーソナリティ・インベントリーはクレッチェマー式人格類型等々である。これらのテストを一堂に集め、個々の質問項目を検討してみると、妥当性に関して興味深い事柄が二点見出される。

即ち、一つは、それぞれの検査は検査の臨床尺度をそれぞれ固有な用語・概念で表しているが、それらの多くは、具体的な質問項目で見える限り、他検査の臨床尺度と因子的に極めて接近、あるいは類似していること（例えば、YG 性格検査の情動性関連尺度、MAS 不安検査、各種向性検査）、二つは、そうした中であって、他の検査とほとんど相関関係がなく、因子的に独立し、極めて検査の独自性や固有性の高いものがあること（例えば、オールポート・ヴァーノン人格検査）である。それでは、類似しているやに思われる各検査間にはどれほどの類似性や同次元性があるのか、独立性が高いと思われるものには他に比べてどのような固有性や異次元性があるのか。

各検査の妥当性や信頼性については、それぞれ検査のマニュアルに触れられている（例えば、辻岡<sup>2)</sup>）。が、他検査との関係については、併存的妥当性を示す際に時折用いられることはあっても、関連する検査とはどのように関連し、関連しない検査とはどのように関連しないのかはほとんど触れられることはない。今、他検査との関連を検討しそれを明かすことは、併存的妥当性、概念的妥当性、因子的妥当性など、各検査の妥当性をより正確に把握する重要な手がかりともなり、種々の条件下に種々の性格検査を適宜選択し、組み合わせ（テストバッテリー）しながら仕事を行う心理臨床家にとって、極めて意義深いことである。

本研究は、臨床的に比較的利用価値の高い 6 つの質問紙性格検査を取り上げ、検査間相関関係を手がかりに、とりわけ他検査との関連性に着目しながら、各検査の妥当性について検討するものである<sup>3)</sup>。

## II. 方 法

### (1) 質問紙性格検査

用いられた質問紙性格検査は、YG 性格検査、MAS 不安検査、淡路式向性検査、IDV 独自性欲求検査、精研式パーソナリティ・インベントリー、オールポート・ヴァーノン人格検査

228  
(33)

\* 一般教育 教授 社会分野

査の6種。それらで測定される臨床尺度（検査項目）は以下の通りで、合計27である。

#### ①YG 性格検査

D（抑鬱性）、C（回帰性）、I（劣等感）、N（神経質）、O（主観的）、Co（非協調的）、Ag（攻撃的）、G（活動的）、R（のんき）、T（思考的外向）、A（支配性）、S（社会的外向）の12の人格特性項目（以下、YGのDなどと略称）を測定する。120の質問項目から成る。

#### ②MAS 不安検査

顕在性不安（以下、MASと略称）を測定する。50質問項目から成る。他にテスト結果の信頼性を診るための、15質問項目から成る虚構尺度 Liescale（以下、Lと略称）がある。

#### ③淡路式向性検査

外向性－内向性（以下、向性と略称）を測定する。50質問項目から成る。得点が高いほど外向的であることを示す。

#### ④IDV 独自性欲求検査<sup>4)</sup>

独自性欲求またはユニークネスの傾向（以下IDVと略称）を測定する。32質問項目から成る。

#### ⑤精研式パーソナリティ・インベントリー

Z（循環質）、E（粘着質）、S（分裂質）、H（顕揚質）、N（神経質）の5つの気質類型に判別する（以下、精研式Zなどと略称）。50質問項目から成る。

#### ⑥オールポート・ヴァーノン人格検査。

シュブランガー、E. の「生の形式」、態度的特性に基づく価値観を測定し、理論人、経済人、芸術人、社会人、政治人、宗教人の6類型に判定する。45質問項目から成る。

#### (2) 被験者

都下の3つの大学における、心理学概論および心理検査法の受講者（1・2年生）395名（男165：女226）。そのうち、6検査すべて受験した者は、157名。

#### (3) 実施方法

上記6種の質問紙検査を、1講義中に1種ずつ一斉に施行。

#### (4) 実施期間

平成12年5月～平成14年7月

#### (5) データの整理

各検査とも男女別に素点で下位集計したところ（表1）、いくつかの臨床尺度（検査項目）で平均点に性差が見られた（t検定）。しかし、各検査の全項目による男女別相関行列を眺めると、尺度間相関関係（相関係数）にはほとんど差異が見られなかったもので、データは性別に分けることなく、男女込みの相関関係を求めて、それを基に分析・検討を行っていくことにした。

①最初に各検査の素点を集計、

②次いで6検査すべて、素点を10段階標準得点（正規分布）に変換、

③YG性格検査は主成分法による因子分析（バリマックス回転）を行い、f1（情動不安定性因子）・f2（行動・積極性因子）の2因子を抽出。その因子得点を用いた2項目をD～Sの12項目に替えて臨床尺度とした。

〈表1〉 男女別平均・標準偏差

	男			女			
No. (変数)	(平均) (標準偏差) (ケース)			(平均) (標準偏差) (ケース)			t
1. D	11.33	6.05	102	12.11	5.49	210	P<0.05
2. C	10.02	4.62	102	10.39	4.95	210	
3. I	9.04	4.93	101	9.66	4.55	210	
4. N	11.21	5.45	102	10.71	4.70	210	
5. O	10.12	4.41	102	10.96	3.63	210	
6. Co	9.39	4.57	102	8.44	4.06	210	
7. Ag	11.28	4.06	102	10.41	4.10	210	
8. G	9.80	5.02	102	10.96	4.73	210	
9. R	12.21	4.51	102	11.92	4.36	210	
10. T	7.90	4.56	102	8.34	4.57	210	
11. A	9.35	4.95	102	10.16	4.77	210	P<0.001
12. S	11.51	5.67	102	12.60	5.08	210	
13. MAS	21.27	7.88	151	21.47	7.81	212	
14. L	3.75	2.40	150	3.71	2.21	213	
15. IDV	98.20	12.79	138	90.38	13.05	219	
16. 向性	104.11	29.96	136	108.37	31.50	206	
17. Z	15.68	5.14	148	16.17	5.07	216	
18. E	14.24	4.33	148	13.40	4.67	216	
19. S	14.52	4.36	148	13.60	4.93	216	
20. H	13.30	5.16	148	13.54	4.53	216	
21. N	14.47	5.80	148	14.02	5.51	216	P<0.01
22. 理論	41.16	6.86	99	38.80	5.56	153	
23. 経済	41.74	5.78	99	40.14	6.22	153	
24. 芸術	47.51	7.55	99	49.45	6.69	152	
25. 社会	42.35	5.91	99	44.09	6.25	153	
26. 政治	37.08	5.50	99	35.54	5.06	153	
27. 宗教	28.87	6.83	99	31.40	6.49	153	

### III. 結 果

〈表1〉は、上記27項目についての、平均値・標準偏差の男女別一覧表である。統計的に有意な差をもって性差が見られた項目は、YGのG（男9.80<10.96女：p<.05\*）、IDV（男98.20>90.38女：p<.001）、オールポート・ヴァーノン人格検査の全尺度、理論人（男41.16>38.80女：p<.01）、経済人（男41.74>40.14女：P<.05）、芸術人（男47.51<49.45女：p<.05）、社会人（男42.35<44.09女：p<.05）、政治人（男37.08>35.54女：p<.05）、宗教人（男28.87<31.40女：p<.01）であった。

〈表2〉〈表3〉は、YG性格検査の相関行列とその因子分析（バリマックス回転）結果である。YGの12の臨床尺度は、そのマニュアル<sup>2)</sup>において、また多くの調査・研究においても<sup>5)</sup>、DからCoまでの上半分とAgからSまでの下半分は互いに異なる独立次元を構成するとされ、海保<sup>6)</sup>はその統計解説の書で、上半分を第1因子、下半分を第2因子と関わる模擬データを作成し、第1因子を情緒不安定因子、第2因子を積極性因子と名付けている。し

〈表2〉 YG 相関行列

No	変数	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
1	D	1.00											
2	C	0.38*	1.00										
3	I	0.47*	0.35*	1.00									
4	N	0.49*	0.36*	0.49*	1.00								
5	O	0.50*	0.38*	0.30*	0.36*	1.00							
6	Co	0.44*	0.36*	0.49*	0.48*	0.37*	1.00						
7	Ag	0.09	0.31*	-0.14	0.09	0.23+	0.13	1.00					
8	G	-0.17	-0.03	-0.24+	-0.32*	-0.06	-0.10	0.26+	1.00				
9	R	-0.19	0.28*	-0.03	-0.23+	0.00	-0.04	0.38*	0.43*	1.00			
10	T	-0.41*	-0.03	-0.17	-0.50*	-0.27*	-0.26*	-0.18	0.12	0.37*	1.00		
11	A	-0.08	0.06	-0.23+	-0.23+	-0.08	-0.06	0.32*	0.57*	0.30*	0.05	1.00	
12	S	-0.22+	0.11	-0.29*	-0.31*	-0.03	-0.23+	0.26+	0.58*	0.42*	0.19	0.65*	1.00

(有意水準; \*P&lt;.05, +P&lt;.01, \*P&lt;.001)

〈表3〉 YG 因子負荷行列  
(バリマックス回転後)

No	変数	f1	f2	共通性
1	1 D	0.801	-0.130	0.659
2	4 N	0.764	-0.228	0.636
3	2 C	0.742	0.194	0.588
4	5 O	0.731	0.147	0.556
5	6 Co	0.723	-0.095	0.532
6	3 I	0.643	-0.365	0.546
7	10 T	-0.528	0.075	0.284
8	12 S	-0.255	0.807	0.717
9	11 A	-0.143	0.792	0.647
10	9 R	0.100	0.700	0.500
11	8 G	-0.340	0.676	0.572
12	7 Ag	0.352	0.612	0.499
	固有値	3.860	2.875	6.735
	寄与率	32.17%	23.95%	56.12%

かし、本調査の結果では、海保その他が言うように第一因子・第2因子が抽出され、従来の諸見解とほぼ同様に、第一因子を情動不安定性因子、第2因子を行動・積極性因子と命名できるが、その構成下位尺度について重要な異同がある。即ち、従来第2因子の構成尺度とされているT(思考的外向)が第1因子にマイナス負荷をもって(即ち、情緒安定—不安定性下位尺度として)関わっていることである。YGに関する一般的な見解と異なるこの結果については、CPTの併存的妥当性を検討する研究<sup>7)</sup>において早くに指摘したところであったが、その後のCPT研究においても付随的に常に認められている(未発表)。

このことは、この二因子に分かれるとする二つの尺度群(D・C・I・N・O・Co—Ag・G・R・T・A・S)の組み合わせによる5類型を基に性格の類型的診断を行うYG診断様式のあり方に重大な変更を要請するものである。ここではこの問題は措き、しかしながらこれを勘案して、多数に渡る12の臨床尺度に替え、以後第一因子(f1と略称)、第2因子(f2と略称)をYGの臨床尺度として用いることにした。

〈表4〉は、全6検査の中、YG性格検査の12尺度をf1・f2尺度に置き換えた全17尺度の相関行列である。

〈表〉5は、〈表4〉の因子分析結果(バリマックス回転)である。固有値・寄与率を勘案し、4因子を抽出した。

#### IV. 考 察

上記の結果に基づき、下記のように考察された。

〈表4〉 17 尺度相関行列

No	変数	f1	f2	MAS	L	IDV	向性	Z	E	S	H	N	理論	経済	芸術	社会	政治	宗教
1	f1	1.00																
2	f2	0.04	1.00															
3	MAS	0.63*	-0.11	1.00														
4	L	-0.21+	-0.12	-0.18	1.00													
5	IDV	0.02	0.37*	-0.08	-0.09	1.00												
6	向性	-0.16	0.65*	-0.25+	-0.10	0.18	1.00											
7	Z	0.13	0.52*	0.13	-0.19	0.09	0.44*	1.00										
8	E	0.35*	0.14	0.25+	-0.06	0.16	-0.09	0.25+	1.00									
9	S	0.28*	-0.15	0.17	-0.06	0.24+	-0.28*	-0.11	0.36*	1.00								
10	H	0.38*	0.35*	0.24+	-0.21+	0.24+	0.17	0.41*	0.43*	0.41*	1.00							
11	N	0.53*	-0.22+	0.58*	-0.23+	-0.30*	-0.24+	0.24+	0.17	0.15	0.22+	1.00						
12	理論	0.02	-0.21+	0.07	0.05	0.07	-0.18	-0.13	-0.03	0.18	-0.05	0.04	1.00					
13	経済	-0.08	-0.04	0.07	0.10	-0.04	-0.00	-0.04	-0.16	0.01	-0.08	-0.03	0.08	1.00				
14	芸術	0.12	0.01	0.07	-0.08	0.00	-0.03	-0.01	0.05	-0.04	0.04	0.09	-0.24+	-0.33*	1.00			
15	社会	0.08	0.08	0.05	-0.08	-0.09	0.10	0.15	0.07	-0.11	0.01	0.10	-0.31*	-0.38*	0.01	1.00		
16	政治	-0.20	0.09	-0.12	-0.01	0.16	0.06	0.11	-0.03	0.03	0.02	-0.15	-0.05	0.13	-0.24+	-0.21+	1.00	
17	宗教	0.22+	0.01	0.10	-0.03	-0.04	0.00	0.11	-0.04	0.12	0.05	-0.30*	-0.35*	-0.06	0.07	-0.28*	1.00	

(有意水準; \*P&lt;.05, +P&lt;.01, \*\*P&lt;.001)

〈表5〉 17 尺度因子負荷行列 (バリマックス回転後)

No	変数	f1	f2	F.3	F.4	共通性
1	11 IN	0.866	-0.077	-0.048	-0.071	0.763
2	3 MAS	0.810	-0.094	-0.002	0.115	0.678
3	1 f1	0.724	-0.021	-0.182	0.336	0.671
4	2 f2	-0.138	0.837	-0.025	0.209	0.764
5	6 向性	-0.225	0.809	0.016	-0.087	0.713
6	7 Z	0.322	0.763	0.031	0.064	0.691
7	13 経済	0.100	-0.005	0.742	-0.181	0.594
8	17 宗教	0.066	-0.032	-0.597	0.091	0.370
9	15 社会	0.112	0.209	-0.553	-0.176	0.393
10	16 政治	-0.185	0.198	0.500	0.096	0.333
11	12 理論	0.056	-0.338	0.485	0.169	0.381
12	14 芸術	0.039	-0.029	-0.476	0.037	0.231
13	9 S	0.161	-0.307	0.118	0.740	0.682
14	5 IDV	-0.328	0.248	0.096	0.644	0.593
15	10 H	0.339	0.378	-0.044	0.637	0.665
16	8 E	0.281	0.078	-0.172	0.622	0.502
17	4 L	-0.349	-0.277	0.058	-0.081	0.209
固有値		2.618	2.532	2.021	2.060	9.231
寄与率		15.40%	14.90%	11.89%	12.12%	54.30%

## (1) 17 尺度因子分析結果 (表 5)

第1因子 (F1) は、精研式の N (神経質)・MAS (不安)・YG の f1 (情動不安定) など、明らかにネガティブな情動性尺度で構成されている。第2因子は、YG の f2 (行動・積極性)・向性・精研式の Z (循環質) など、ポジティブな行動性に関連している。第3因子は、オールポート・ヴァーノン人格検査の尺度のみで構成され、情動性や行動性などとは全く無縁な価値観因子である。第4因子は、精研式の S (分裂質)・H (顕耀質)・E (粘着質) と IDV (独自性欲求) によって構成され、自己意識や自我意識との強い関連が示唆される。MAS の L (虚構尺度) のみ、どの因子にも関連しない。

以上から勘案して、各因子を以下の如く命名した。

- \*第1因子 (F1)：不安・緊張・情動不安定性因子
- \*第2因子 (F2)：外向・社交・活動性因子
- \*第3因子 (F3)：価値観（男性的・女性的）因子
- \*第4因子 (F4)：自己・自我・主張性因子

第3因子については(7)で後述される。

## (2) YG 性格検査

YG の f1 因子は MAS (不安尺度)、精研式 N (神経質) と共に全体の第1因子 (F1：不安・緊張・情動不安定性) を構成し、f2 因子は向性、精研式 Z (循環質) と全体の第2因子 (F2) を構成するなど、それぞれ、情動不安定因子、行動・積極的因子と呼ぶにふさわしい。また、f1 及び f2 は因子的にも相互に全く独立的である ( $r = -.04$  ns)。YG 性格検査においては、例えば D・C・I・N・O・Co など情動不安定項目が互いに正負の相関関係で錯綜し、情動性について診断が困難を極めることが臨床によく見られるが、本研究で行ったように因子得点を用いて f1 及び f2 尺度を利用するなら、YG 性格検査は概念上も明快な、よりいっそう有効な情動性および行動性診断検査となるだろう。

## (3) MAS 不安検査

YG の f1 (情動不安定)、精研式 N (神経質) と第1因子を構成し、不安・情動不安定尺度としての妥当性が高い。L (虚構尺度) については、その他の臨床尺度とは多少の相関性を示すが (f1： $r = .21$   $p < .05$ 、H： $r = -.21$   $p < .05$ 、N： $r = -.23$   $p < .05$ )、因子分析結果ではどの因子軸にも属さない。検査の狙い通りに、情動性、行動性、自己・自我、価値観といった性格諸次元とは異なる次元の、極めて独立性の高い臨床尺度であり、その意味でも、テスト結果の信頼性測定尺度としての妥当性が高い。なお、僅かながら、L (虚構尺度) が高いほど MAS (不安) が低くなるという、両者間に負の相関性が見られることは ( $r = -.18$   $p < .05$ )、非内省性や自己確信性など、L が関与すると推されるものを何ほどか示唆するようで、興味深い。

## (4) IDV 独自性欲求検査

IDV と有意な相関関係を示す臨床尺度は少なく、その数値も低い。また、その中で比較的高い相関性を示すものは第2因子群の YGf2 (行動・積極性) ( $r = .37$   $p < .001$ ) と第1因子群の精研式 N (神経質) ( $r = -.24$   $p < .01$ ) であるが、IDV はそれらと同じ因子群には属さず、それらよりも相関性の低い精研式の S (躁鬱質)・H (顕耀質)・E (粘着質) の3尺度とともに第4因子群を構成している。他には、第2因子群の向性と多少の相関関係を示している ( $r = .18$   $p < .05$ )。これらの結果から、本テストは他の臨床尺度との関係性は希薄で、活動性や開放性、さらには自我意識や主張性やユニークネスなどを測定する「独自性欲求検査」として、かなりの自律的、概念的な妥当性を有しているやに推測される。

## (5) 淡路式向性検査

YGf2 (行動・積極性因子)、精研式 Z (躁鬱質) との相関が高く、それらと共に第2因子 (外向・社交・活動性因子) を構成している。しかし、他にも MAS (不安) との負相関 ( $r = -.25$   $p < .01$ )、精研式 S (躁鬱質) との負相関 ( $r = -.28$   $p < .01$ )、精研式 N (神経質) との負相関 ( $r = .24$   $p < .05$ ) など、情動性次元にもかなりの関連性も見られ、このことは本テ

ストにおける「向性」の概念が行動と情動の両次元から構成されていることを推測させ、テスト使用の際にはとりわけ、「向性」概念の確認作業が必要であることを示唆しているように思われる。

#### (6) 精研式パーソナリティ・インベントリー

精研式パーソナリティ・インベントリーは性格を類型化することを目的としている。とすれば、各類型は当然それぞれ他の類型とは独立的（即ち、負相関または無相関）でなければならない。しかし、S（分裂質）・H（顕耀質）・E（粘着質）の3尺度がIDV（独自性欲求）とともに第4因子を構成しており、既述したように、これらの共通項から、第4因子は自己・自我・主張性因子と命名されたが、5尺度の二者相関関係がZ（躁鬱質）とS（ $r=-.11$  ns）、N（神経質）とS（ $r=.15$  ns）の2つを除きすべて有意な正相関を示していることなど考え併せると、5尺度の独立性は極めて弱く、類型論としての本テストの妥当性には疑念が生じる。

#### (7) オールポート・ヴァーノン人格検査

これも類型論性格検査であるが、以下の三点から、検査の独自性と下位尺度（類型）の独立性が極めて高い検査であると結論できる。即ち、理論人、経済人、芸術人、社会人、政治人、宗教人の6類型尺度は、①尺度間では相互に正相関することなく、15の組み合わせ中、9ペアが有意な負相関関係を示し、②他検査と有意の相関関係を示すものはほとんど見当たらず、③他検査の臨床尺度と全く関わることなく、第3因子（価値観）をこの6尺度だけで構成している。

なお、6類型尺度が各独立しながら、第3因子内において（〈表5〉）、正・負の符号をもつて、経済・政治・理論と宗教・社会・芸術の2方向に画然と分かれている。本テストについては、男子は前者（経済・政治・理論）の価値を高く後者（宗教・社会・芸術）の価値を低く評価することが言われており<sup>8)</sup>、平均値によって類型の順位を見ると（〈表1〉）男女とも全く同序列（芸術>社会>経済>理論>政治>宗教）であるが、尺度毎に男女の平均値を比べると、前3者についてはいずれも男子>女子、後3者は男子<女子と明快に分かれている。これによって、ここでは取り敢えず、第3因子は価値観（男性的-女性的）因子と命名する<sup>9)</sup>。

### V. 要約と今後の課題

情動・行動・価値観等にわたって、臨床的によく用いられる、あるいは興味深い質問紙性格検査6種類を同一被験者に実施し、その相関関係に基づき、因子分析（バリマックス回転）を行った。4つの因子が抽出された。

第1因子（F1）：不安・緊張・情動不安定性因子

第2因子（F2）：外向・社交・活動性因子

第3因子（F3）：価値観（男性的-女性的）因子

第4因子（F4）：自己・自我・主張性因子

相関行列とこの因子分析結果を参照しながら検討すると、精研式パーソナリティ・インベントリーを除いて、各検査は、他検査の臨床尺度と関連的であったり（YG 性格検査・MAS 不安検査・淡路式向性検査）、あるいは独立的であったり（IDV 独自性欲求検査・オ

ールポート・ヴァーノン人格検査)しながら、それぞれ目標とする臨床尺度を測定する妥当な検査であると言い得よう。

ところで、ここで抽出された4つの因子(性格次元)は、簡要に言い直せば、情動次元、行動次元、価値観次元、自己・自我次元であり、それは、性格を包括的にとらえる時の基本的分析次元でもある。われわれは、性格を総合的に理解しようとする際にテストバッテリーを組むが、おのずとこの4つの次元に沿って、例えば本研究で用いた検査の中から複数選択していたはずである。しかし、ここで見てきたように、各検査は因子的に重複・交錯し合うことが多く(即ち、類似の質問項目が多く)、それらを同一の被験者に連続的に行うことは、検査に対する疲労や飽きや疑念を生じさせ、検査結果の信頼性を低下させる因ともなる。そこで、これらの性格次元を比較的短時間で一度に測定できる検査が開発されれば、臨床的に極めて有意義である。

本研究では各種質問紙検査を一堂に集め、パーソナリティの4つの基本的次元を抽出したが、各検査を仔細に検討すれば、その4次元をもたらしに至った有効な具体的質問項目が抽出されるはずである。それらを集めて因子分析的研究を行い、再び同じ4つの因子を抽出できれば、性格を診断する総合的質問紙性格検査作成の糸口が得られる。これが、本研究に引き続く、今後の課題となるであろう。

- 1) 性格・人格・パーソナリティについては、概念上の混乱がある。人により、立場により、文脈によっていろいろ使い分けられている。本論文では、諸検査が唱うように、例えば、「YG 性格検査」・「オルポート・ヴァーノン人格検査」・「精研式パーソナリティ・インベントリー」などとそのまま用いたが、他は全て「性格」で通した。これらの概念については、次の文献に詳しい。

「性格・人格・パーソナリティ」(2001)『ニューズレター Vol. 14』、日本性格心理学会

星野命、大村政男等9人の碩学が、それぞれの立場から、書物や辞書では学べない味わえない、蘊蓄のあるところを披露している。

- 2) 辻岡美延(1976)「新性格検査法—YG 性格検査実施・応用・研究手引」日本・心理テスト研究所
- 3) 本研究は、CPT(カラー・ピラミッド・テスト)の妥当性研究の際に、付随的に行ったものである。
- 4) IDV 独自性欲求検査「パッケージ・性格の心理⑤」190-191、ブレーン出版(1996)  
Snyder & Fromkin(1980)の「独自性欲求測定尺度」を岡本浩一(1985)が翻訳し開発したもの。岡本はその後、これを再吟味し「ユニークネス尺度」を考案している。
- 5) 藤土圭三(1991)「YG 性格検査(MAS)を含めて」『臨床心理学体系⑤・人格の理解』119-139、金子書房
- 6) 村上隆(1985)「因子分析」『心理・教育データの解析法10講』(海保博之編)150-172、福村出版
- 7) 宗内 敦(1980)「CPTの妥当性の検討(2)―非行少年の色彩反応所見・その2」第17回日本犯罪心理学会(犯心研、16、特別号、60-61)
- 8) 関 計夫(1957)「価値心理学」『心理学事典』91-92、平凡社
- 9) これは、さらに検討すれば、前者(経済・政治・理論)は現実社会を支配するもの(現実的価値)、後者(宗教・社会・芸術)は現実社会を昇華させるもの(理想的価値)として、男性的・現実的・女性的・理想的とでも命名できる。が、本研究では、併存的にそれを論証する何ものもないので、軽々に論じることは控え、これについては他の機会に譲ることとする。

付 本論文の一部は、第45回日本教育心理学会総会(2003年)で発表されている。総会発表論文集410